

『雑文穿袋』注釈稿（下）

伴野 英一

（国語・国文学）

（令和六年十二月二十六日受理）

はじめに

前号に続き、『雑文穿袋』に注釈を施す。紙幅の都合から上・中・下の三回に分ける。

底本の書誌は前々号をご参照願いたい。底本の閲覧・使用をさせていただいた早稲田大学図書館に感謝いたします。未だ至らぬ点多いので大方のご批正を乞う。

翻刻凡例

一、翻刻にあたっては可能な限り底本通りにすることを目指した。誤脱と思われる箇所も底本通りに残し、語釈において指摘した。

一、丁移りはその丁の表及び裏の末尾に、表であれば（壹オ）（八

オ）、裏であれば（壹ウ）（八ウ）などと、底本の丁付通りの漢数字と表裏の略記を組み合わせて示した。なお丁付を欠く場合は（丁付なしオ）などとした。

一、句読点は底本通りとした。

一、仮名は現行の平仮名に改めたが清濁は底本通りとした。明らかに片仮名で表記しようという意識をもって書かれたと思われる片仮名は底本通りとした。

一、繰り返しを表す反復記号などは底本通りとした。

一、漢字は原則として新字体に置き換えた。ただし特記すべきだと考える表記については語釈において指摘した。

一、口絵はこれを省いた。

一、作品・引用文中に現在の人権意識にそぐわない語句・表現があるが、歴史的資料である原文を尊重してそのままとした。

※頻出する典拠は以下のように略した『雑字類編』＝『編』、『南山俗語考』＝『南』、『唐話纂要』＝『纂』、『改正月令博物笈』＝『博』、『事物異名類編』＝『異』、『箋註蒙求』＝『蒙求』

《翻刻》

だんくこれをいひたつれば(二十四ウ) あまりくひ物で手間かたれましよう是は御養生心でもつきまじたらそのせつ御せんぎなさるがよいさて人倫の事をおはなし申さふ

○毛詩に桑梓さうし指と小ゆびとにたとへるやつてござる
大夫たいふ人 大孺たいじゆ人など、母のこ
伯はく 叔しゆく 二男 仲ちゆう 三男 季き 四男 侯こう 伯はく 大名 (二十五オ) 大夫たいふ 家老 圉きよ
人じん むまやべ 監門かんもん 門番 閤人こんじん 同 抱閤ほうかく せきもり 角觥かくかう すまふ 食客しやくかく らう
嬖妾へいせつ 手かけ也 嬖臣へいしん しゆつと 奴隸ぬれい 下男 婢ひ 下女 孩兒かいに おさな子 家僮かどう
めしつかい 里正りせい 名主 五甲ごかう 五人ぐみ 麒麟きりん 兒子に 利口りこう な 縉紳しんしん 先生せんせい とはきんく
ふ事で 丈人じやうじん 目うへの人を 同僚どうりやう 同役 商客しょうかく あきんど 遺遊いゆう へやすみ 倅すい 同
友于ゆうう 兄弟中の 家累かゑ やくかい 同堂どうどう いとこ 庸人ようしん やとひ人 (二十五ウ) 痴ち
漢かん ばかもの 鮑知ほうち これは中のよい友て御さる管仲くわんちゆう 鮑ほう 膏梁こうりやう 豎子じゆうし たぬ人をいふ 任じん
俠きやう 男だて 浮屠ふと 氏出 俳優はいゆう 侏儒しよにゆ 狂言きやうげん やくしや 新知しんち つきあふ人 崑崙こんろん 奴

くらん坊 瞽者こしや めくら 姦夫かんふ 間夫 花子くはし こじき 仵作ごさ あた さてく御退たい
屈くつでござらうまづ一ふくおあがりなさい此蔵しざうたばこのみながら御と
この御花は梅そうに御さるがはやう (二十六オ) 咲ました先生せんせい いや
あれは唐花とうはでござるあのための寒菊かんきくと申ものが雪霜せつそうを凌しのいで咲ますが
やさしいものでござるナルホドくそばに御さるは琴さうにござりま
すか先生あそばしますすかイヤ琴はひさしういたしませぬそれゆゑ絃い
も御ざらず陶淵明とうえんめいが無絃むけん琴といふものでまことの長物ちやうぶつで御さる
(二十六ウ) 此蔵しざううなつきあの陶淵明とうえんめいといふ人は酒ずきでは御ざり
ませぬがなるほどおもしろい酒のみでござる首にかぶつてをるが漉ろく
酒巾しゆけんと申て酒こしでござる種うゆる 稊田じゆつてんと申て田地酒をつくる米をつく
つた男でござるむたなやつらに折腰せしやうよりはひつこんでのむがよい
と五斗米ごとうまいを辞じしました職しやくをすてし事也 (二十七オ) しかしそれも空くう
囊のうではいかぬ事でござる 空囊くうなうは銭な

《語釈》

●桑梓さうし 父母を敬うこと。「桑ハ蚕ヲ飼フモノ梓ハ器ヲツクル木ニ
テ龜人ノ家ニウユル木ナリ子タルモノハ父母ノ家ニウヘヲキタル木
ヲモ恭敬メウヤマヒ大切ニスルコトナリ」(安永九(一七八〇)序
『毛詩国字弁』三 小雅・小弁) ●高堂かうたう 家大人かたいじん 只応伝善政、
日夕慰高堂(送黎六郎赴陽翟少府) 韋応物(自家大人) (増広
写信必読) 九 ●北堂ほくたう 家大人かたいじん 大孺人たいじゆにん 北堂ほくたう (『編』)
「大夫人たいふじん オクサマ」(『南』)。「大孺人たいじゆにん」未詳。「孺人じゆにん」は本妻の意。

「天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰婦人、庶人曰妻」
 (『礼記』曲礼下) ●泰山 〇妻父母 今人呼父為岳公、全泰山
 (『写信必読』九) ●豚犬 〇「賤息、豚犬」(『編』) ●伯／叔／仲／
 季 〇「伯・仲・叔・季」の順であるべきところ。「故以時長幼號曰
 伯、仲、叔、季也。伯者、長也、伯者子最長、迫近父也。仲者、中
 也。叔者、少也。季者、幼也」(『白虎通』八・姓名)。「惣領」は長
 男。「長子」(『編』) ●侯伯 〇「廟前ハ乃チ肅然。天下ノ侯伯。皆
 石燈。凡ソ諸侯ノ鎮タル大阪城ニ鎮タル者。各々建ツ石燈ヲ於廟前
 詩」中) ●大夫 〇「我藩の大夫岡新左衛門といへる人のもとに持行
 しか」の次第なれば此蘭書求度と告たり(文化二二(一八二五)
 刊『蘭学事始』上)。岡新左衛門は小浜藩の家老。 ●圉人 〇軍に仕
 えて牧畜を行つた役職。「掌養馬芻牧之事」(『周礼』夏官司馬)。
 「厩養。圉人」(『編』) ●監門 〇「門兵。監門」(『編』) ●閽人 〇
 「閽人」(『異』) ●抱閽 〇「羸乃夷門抱閽者也」(『史記』魏公子列
 伝) ●角觥 〇「角觥人」(『編』) ●食客 〇「食客」(『編』) ●嬖
 妾 〇「妾、嬖妾」(『編』) ●嬖臣 〇「嬖臣」(『編』) 「出頭」は、
 寵愛を受けて出世するの意。「父はそんじやうそこに。奉公せし
 悴 侍なりしが。百ぬらりのうそつき追従らしきへつらひものな
 りければ。主君の氣にいりて。知行をとり出頭しけるほどに」(寛
 文初年刊『浮世物語』一の二) ●奴隸 〇「商販奴隸之賤シキ或ハ有
 り下孝友廉直出テ天性ニ士人之所ノ不レ及ハ」(『童子問』二九)
 ●婢 〇「婢」(『編』) ●孩兒 〇「嬰兒。孩」(『編』) ●家僮 〇「僮

同奴也」(『増広写信必読』)。召使の少年。「家童」に同じ。「瘟病は人
 を過つ物と聞ゆるから家童らもあへてかしこに行しめず」(明和五
 (一七六八)序『雨月物語』菊花の約) ●里正 〇「里正」(『編』) ●
 五甲 〇「五甲頭」(『清朝俗語解』) ●麒麟児 〇「並是天上
 麒麟児」(徐卿二子歌)杜甫) ●縉紳先生 〇孔子没後の無名の儒者
 たちを指す語。「然而縉紳先生之徒負孔子礼器往委質為臣者」(『史
 記』儒林列伝) ●丈人 〇年長の者を敬つていう語。「遇丈人、以杖
 荷篠」(『論語』微子) ●同僚 〇「同僚」(『編』) ●商客 〇「賈人。
 客商」(『編』) ●遺遊 〇未詳。 ●倅 〇「遊(游)倅」をいうか。
 「凡国之政事、国子存游倅、使之修徳学道、春合諸学、秋合諸射、
 以考其芸而進退之。游倅、未仕者」(『太平御覧』皇親部二二・太子
 一) ●友于 〇「孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政」(『論語』為政)「
 友」愛 〇「友于」(『異』) ●家累 〇「家累」(『編』) ●同堂 〇
 「従父兄弟 同堂」(『編』) ●庸人 〇「庸与傭通」(『正字通』)。「因
 樹為屋、自同傭人」(『後漢書』周黄徐姜申屠列伝)。「庸人」は凡庸
 な人の意。「庸夫。一人」(『編』) ●痴漢 〇「痴人。痴漢」(『編』)
 ●鮑知 〇「管鮑の交わり」の故事を指すと思われる。「管仲夷吾者、
 穎上人也。少時常与鮑叔牙游、鮑叔知其賢」(『史記』管晏列伝) ●
 膏粱豎子 〇「膏粱」は美食。転じてそのような食事ができる裕福な
 人。「所以戒膏粱之子也」(『文心雕龍』三・雜文)。「豎子」は未熟
 者をさげすんでいう語。または、子ども。「龐涓自知智窮兵敗、乃
 自刎、曰、遂成豎子之名」(『史記』孫子吳起列伝) ●任俠 〇

「任使」(〔編〕) ●浮屠氏 〓「今世ノ詩人、于鱗氏ヲ尊崇スルコト恰モ浮屠氏ノ仏祖ヲ尊崇スル如シ」(天明三(一七八三)刊『作詩志』) ●俳優侏儒 〓「乱世不然、汙漫突盜以先之、權謀傾覆以示之、俳優、侏儒、婦女之請謁以悖之」(『荀子』王霸) ●新知 〓「故人。新クラシキ知」(〔編〕) ●崑崙奴 〓「崑崙奴子」(〔編〕) ●瞽者 〓「瞽者無以与乎文章之觀」(『莊子』内篇・逍遙遊) ●姦夫 〓「姦夫マコ」(『小説字彙』) ●花子 〓「花子ハナゴ」(『唐音和解』) ●伴作 〓「伴死骸ヲ改ルモノ」(『清朝俗語解』) ●唐花 〓「唐花」は中国由來の唐花様の花をいうか。「唐花カハナの諸ハナ五色イロゴロコシの玉たまを敷敷て金鶏キンケイのはなち飼かひ」(元禄六(一六九三)刊『浮世榮花一代男』四の一)。「むろざき」は室咲。温室などの室内で咲かせた花。「又天情せいを請うけぬ玉椿たまはらを。室咲むろざきさせしは花はなもいたみて」(貞享元(一六八四)刊『諸艷大鑑』五の二) ●とめ 〓生け花で挿した花が緩まないように根元に添える草花。根締め。「留とめの花ちりぬるをまついろは茶屋」(『俳風柳多留』九二二) ●無絃琴 〓「無弦の琴」の故事から。「畜素琴一張、弦徽不具。每朋酒之会、則撫而和之曰、但識琴中趣」(『蒙求』陶潛歸去) ●漉酒 巾 〓「逢其酒熟、取頭上葛巾、漉酒、畢還復著之」(『蒙求』淵明把菊) ●種秫田 〓「秫」はモチアワ。酒の原料となる。「在県、公田とく米」は年に五斗のわずかな扶持。薄給の意。「陶淵明は五斗米にとく米」は年に五斗のわずかな扶持。薄給の意。「陶淵明は五斗米にとく米」は年に五斗のわずかな扶持。薄給の意。

毫、仮道於汝陰、因得閱書于子履之室。而雲章爛然、輝映日月」
 (『容齋三筆』一二) ●雲牘（未詳） ●鱗鴻（魚や雁が手紙を運んだということから転じる）「只就鱗鴻求遠信」(『王三十七自京垂訪、作此送之』徐鉉) ●莊尺（未詳） ●情書（恋文）「或寫情書來叫他去」(『金瓶梅』九四) ●貴閫（未詳） ●万福（以下のような手紙の決まり文句）「富貴万福猶以テ幸甚々々」(慶安二(一六四九)刊『庭訓往来註』) ●相思（江南江北愁望、相思相憶空吟）「隔漢江寄子安」(魚玄機) ●加餐（お体を大切に、の意）「遠遊令人瘦、衰疾慚加餐」(『水会渡』杜甫) ●自玉（未詳） ●自愛（殊御自愛） (寛文元(一六六一)刊『新刊吾妻鏡』一〇・建久元年十月十三日甲午) ●足下（「足下」（称至交之友也））「写信必読」(六) ●不佞（「学者の足下」（おやしき））「藩中の貴殿。俠者のおみさん。通のぬし。何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ」(安永年間刊『道中粹語録』) ●僕（「僕自謙之辞」） (『増広写信必読』六) ●尊誨（「数日聽尊誨、敬当銘佩、請出整衣拜辞」） (『朱子語類』朱子五・論治道) ●疎逖（「使疏逖不閉」（索隱曰逖遠言其疏絶也）） (『司馬相如列伝』古活字版) ●候起居（「今因便鴻謹候起居」） (『金瓶梅』六七) ●無恙（「問曰子之君無恙乎」） (『説苑』奉使) ●期面晤（「面晤」は面会して話す意）「尚隔ッ音問ヲ悠悠タル吾思忽ニ披レ華絨ヲ無レ異ニ面晤ニ」(貞享元(一六八四)刊『濟北集』九)。「貴面」も同意。「互に一座も打絶え。貴面ならねば便も聞かず」(享保五(一七二〇)初演『心中天の網島』上) ●咫尺千

里（氣持ちが通じていなければ近くにいても千里の遠くに離れているように感じるという意）「含情咫尺千里、況聽家家遠砧」(『隔漢江寄子安』魚玄機) ●誦采葛（「詩経」収載の詩、王風「采葛」の「彼采蕭兮。一日不見、如三秋兮」による） ●交臂（「相逢且交臂、相命且銜杯」） (『使至汴州喜逢宋之問』李夔) ●握手（「握手於此地、当歡反成悲」） (『贈史修文』沈千運) ●故旧（「君子篤於親、則民興於仁、故旧不遺、則民不偷」） (『論語』泰伯) ●相識（「相識」（チカフキシルビト）） (『編』) ●一面識（「今據レハ其書ノ所レ言則白石與洞巖未タ三嘗テ有ニ一面識」） (文政一三(一八三〇)刊『先哲叢談後篇』四)。「初会」は、ある特定の遊女に逢うのが初めて。「うら（裏）」は二度目ということ。「三会目」まで進むと、その遊女と「馴染」となる。 ●交芝眉（「芝眉」は唐の房瑄が紫芝の眉を褒めた故事から転じて、ひとの顔を敬って言う）「房瑄每見德秀、嘆息曰、見紫芝眉宇、使人名利之心都尽」(『新唐書』列伝一九・卓行) ●觀眉宇（「觀」は見る）「眉宇」は眉の辺りの意。「汝陽讓帝子、眉宇真天人」(『八哀詩』贈太子太師汝陽郡王璵) 杜甫 ●知己（「知己」（好朋友也、謂知我爲人也）） (『写信必読』四) ●同人（「同人永日自相將」） (陸勝宅秋暮雨中探韻同作) 張南史 ●同遊（「同遊三四人、兩人不敢上」） (『登香爐峰頂』白居易) ●同盟（「高老先生原是老先生同盟、將來自是難兄難弟可知」） (『儒林外史』翰林高談龍虎榜 中書官占鳳凰池) ●同袍（「所是同袍者、相逢尽衰老」） (『長歌行』王昌齡) ●雉檀（赤い雉と白い犬の血を啜って盟を誓う為に作った壇という）

●断金交〓金属をも断ち切るほどの厚い友情をいう故事。「二人同心、其利断金」(『周易』繫辞上) ●刎頸交〓互いのために首を刎ねられても悔いはないというほどの友情をいう故事。「鄙賤之人、不知將軍寬之至此也。卒相与驩、为刎頸之交」(『史記』廉頗藺相如列伝) ●御李〓官人李膺は師である荀淑の子、荀爽に慕われた故事による。「荀爽嘗就謁膺、因為其御、既還、喜曰、今日乃得御李君矣」(『後漢書』党錮列伝) ●登龍門〓公正な李膺(前項参照)に認められた若い官吏は、出世が約束されたようなものであったので、黄河上流にある急流の竜門を登った鯉は竜となるという伝説になぞらえられた故事から。「是時朝廷日乱、綱紀隳弛、膺独持風裁、以声名自高。士有被其容接者、名为登龍門」(『後漢書』党錮列伝) ●夙愛〓「或得将卑職汎房另行更換庶無貽悞。因恃、憲台夙愛。故言無不尽耳」(『福惠全書』五) ●心酔〓「心酔」(ホレル) ●莫逆〓「(互いの)心に逆らうこと莫し」から。「四人相視而笑、莫逆於心、遂相与為友」(『莊子』内篇・大宗師) ●面罄〓未詳。 ●尽飲〓「人生得意須尽飲、莫使金尊空对月」(『将進酒』李白) ●投轄〓「遵者酒、每大飲、賓客滿堂、輒傾関門、取客車轄投井中、雖有急、終不得去」(『漢書』游侠伝) ●設榻〓「榻」は腰かけの意。「徐稚字孺子《略》蕃在郡不接賓客、唯稚来特設一榻、去則縣之」(『後漢書』周黄徐姜申屠列伝) ●狂顧〓「狂」は「狂」の譌字。「狂、狂字之譌」(『正字通』)。「狂顧」は慌てふためくの意。「此由禽鹿、少見馴育、則服從教制、長而見羈、則狂顧頓纓、赴踏湯火」(『芸文類聚』

二一・絶交)。割注は急な来客を迎えた様をいうか。 ●信宿〓二連泊するの意。「村邑ハ多ク鶏ヲ飼フモノナルニ。予ガ縁家佐々木友賢トイフ医生アリ。撰津ノ小野原ニ住ス。ソレニ信宿セシコトアリシ。絶テ鶏声ナシ」(『明和五(一七六八)刊』『孔雀樓筆記』四) ●雲談〓未詳。 ●十日飲〓「寡人間君之高義、願与君為布衣之友、君幸過寡人、寡人願与君為十日之飲」(『史記』范雎蔡沢列伝) ●眼中人〓「不見眼中人、天長音信断」(『大堤曲』李白) ●意中人〓「雲迷水隔意中人」(『甘州子』顧夔) ●聚德星〓「仲弓与諸子侄造季和父子討論、于時德星聚。太史奏曰、五百里内有賢人聚」(『蒙求』荀陳德星) ●乘興〓「王子猷居山陰、大雪夜、眠覺、開室酌酒、四望皎然、因起彷徨、詠左思招隱詩、忽憶戴安道、時載在剡溪、即便夜乘輕船就戴、經宿方至、既造門、不前便返、人問其故。王曰、吾本乘而行、興尽而返、何必見戴」(『芸文類聚』二 天部下・雪) ●知音〓「呂氏春秋」孝行覽・本味にある伯牙と鍾子期(トネコ)の故事より転じて親友の意とする。「伯牙鼓琴、鍾子期聽之、方鼓琴而志在太山、鍾子期曰、善哉乎鼓琴、巍巍乎若太山。少選之間、而志在流水、鍾子期又曰、善哉乎鼓琴、湯湯乎若流水。鍾子期死、伯牙破琴絕弦、終身不復鼓琴、以為世無足復為鼓琴者」。「朋友。知音」(『編』) ●家猪〓「豕。家猪」(『編』) ●猫王〓未詳。 ●猫兒〓「猫兒」(マニウネコ) ●麒麟猫〓捕食を行わないとされる中国古代の瑞獸「騶虞」と、瑞獸「麒麟」を混交したか。「麒麟騶虞ハ俱ニ好ムレニ仁之獸也」(寛政元(一七八九)序『故事成語考集註』鳥獸) ●夜蟲〓未詳。

●大蟲（ゲートン）「大蟲（トラ）」●「南」●蠅虎子（ハイトリグモ）「蠅虎」●豹脚（カヤバカ）「（編）」●蜈蚣（ウゴン）「蜈蚣（ムカデ）」●「南」●蚣蚣（カマキリ）當時の辞書類ではコオロギなど複数の種にあてているが、以下にあるように断定を保留する。「順和名抄」云絡緯一名促織（和名波太）於里女蜻蛉（和名古蝸）蜚一名蚣蚣一名蟻蝨一名春黍（以彌豆木）萬呂蟋蟀一名蜚（和名木里須）按是レ皆混雜シテ異名和名共ニ（クイチカフ）齟齬也（和漢三才図会）五三三●地龍（ミズ）「蚯蚓」●「異」●蝦龍（ミズ）未詳。●属玉（ミズ）「属玉、水鳥、似鵝鵲、以名觀也」《太平御覽》居処部七・觀。「鵝鵲（カウシヤク）いさい」《元祿八（一六九五）》刊『頭書増補訓蒙図彙一三三』●丁子蛙（カヘルノコ）「蝦蟆子」丁子（異）●狡狴（シ）「獅子、狡狴」《（編）》●壁錢（シ）通常はヒラタグモをいう。「壁繭」壁錢（シ）《（異）》●四脚蛇（シ）「四脚蛇（トカゲ）」《清朝俗語解》

《翻刻》

扱あのみかふに見へます大木がさけてをりますが雷（かみなり）の落た（三十一オ）木でもござりまするかナルホドくその雷おちか、りし木を霹靂（へきれき）木といひます此手水鉢の下にある雪の下といふ草を虎耳草（コジヤウ）といひとらのみ、に似たらしいかたちで御ざるすべりひゆを馬齒（ばし）と申かなるほど葉は馬の齒（は）といふ物でござるとかく唐（から）は見たてが上手（三十一ウ）でござる此類は追而の事あまり御退屈でも御坐らうから部（ぶ）わけなしにこれから出放題（でうたい）におはなし申ます
○莊衛（さうが）やしき 別莊（べつさう）下やしき 別業（べつげふ）同 精舍（せいじや） 香台（かうたい） 香利（かうり）などい申は 井（せい）

里（り）いなか 僻地（へきち）かたゑ 雲母（うんぼ）碓（たい）みづぐるま 水碓（すいだい）同 十字街（じうじかい）四ツ辻（よつつじ）也 僑居（きうきよ） 借家（けっか） 賃房（ちんぼう）銭（せん）やちん 典舖（てんぽ）しちや 典物（てんぶつ）もつ （三十二オ）阿堵物（あどぶつ）せに 孔方（こうほう）同 杖頭（じやうとう）銭（せん）百文なり阮（げん）杖のさきへ銭百文かけて日々出るさし 朱提（しゆてい）銀 方金（ほうきん）金（きん）老歩 碎銀（さいぎん）まめいた 貼銭（てせん）つりの 南廷（なんてい）に南鏡（なんきやう）也東鑑（とうかん） 当四 銭（せん）四文銭也当四銭一（せん）と 子銭（しせん）家 金（きん）かし 借約（けいやく）は證文 券書（けんしよ）同 表證（ひやうしやう）也證古 息利（しきり）そく 一円一兩也 一天同 一地歩（いちちふ）歩也 一方同 會計勘定 經濟 小食（せうじき）切米 月俸（げつぽう）扶持方 采地（さいち）地行所 四宝（しほ）紙筆硯 管城子（くわんじ）筆 毛穎（もうえい）同 豪家（ごうか）富家（ふか）身代よし也 寒素（かんそ）賤 英雄（いゆう）人にすぐ 豪傑（ごうけつ）千人万人に 鈍物（どんぶつ）にぶき人 鷺才（ろさい）智恵なし 老実（らうじつ）りちぎ 僥倖（きやうしやう）こはれさいは 綽名（せつめい）いづれも 紀律（きりつ）おきて 遺業（いげふ）家とく 連城（れんじやう）ふ秦十五城をもつて壁に 小へんとい 廉直（れんぢき）段やす 上直（じやうぢき） 當番 下直（げぢき）あけ番 心胸磊落（しんきやうらいらく）（三十三オ）才（さい）きしやうひろく 意氣慷慨（いぎかうがい）いさちたて引な 意氣揚々（いぎようよう）したりがほに一ぱ 睽（かい）見廻す也 睥睨（へいげい）高き所より見おろすなり人をみ 顧眄（こめん）ふりかへ 仰慕（けいぼ）人をしたい 點頭（てんとう）づく 蓬頭（ほうとう）びん 跣足（せんそく）すあし 空心（くうしん）はらのへ 亡命（むうめい）かけおち 躊躇（ちゆうちう）すみ 点頭（てんとう） 佇立（ちやうりつ）た、ずむ 豪具（ごうぐ）おこり道具也 雅馴（がしゆん）むつくりと 強禦（けうぎ）權門也 解褐（かいこ） 浪人（らうじん）より召 叔世（しゆくせい）後世也 胡祝（こしゆく）仏経也 雅馴（がしゆん）したる也 強禦（けうぎ）權門也 解褐（かいこ） 書淫（しよゐん）書物ずき 目睫（もくせつ）毛 循覽（じゆんらん）のを見 胡做（こしやく）了（しやく）うさうさ 穢穢（てい）雨具 月 離（り）畢（ひ）雨空也ひつ 南箕（なんき）崇 名風のふく事 房星（ぼうせい）馬星也馬の 也河魚（かぎょ）はらはは 疥癬（せけん）患 ぞとしたるたむしなどやらの出来物也 腹心（ふくしん）疾 疾（しやく）むつやまし にか、しり甚（しん）くら 疾在（しやく）膏肓（こうかう） 一病也左伝の語 錐脫（しゆいだつ） 囊（ふく）人のきりやう目だつ 脛食（けいじき）に食 二三四オ と也 蘭閣（らんかく）クク 人をはむる事 喝采（かくさい）はめることば 敬服（けいふく）開口く（な）といふことばあ 包袱（ほうふく）つ、み 完壁（くわんぺき）國へやりし玉をとりかへしまつた

[illegible]

語釈

●霹靂木―「霹靂カミナリ」(『伊呂波字類抄』)。「時ニ有テレ人曰イナリト」
 霹靂木也。不レ可レ伐。河邊臣ノ曰。其雖ニ雷神イナリト。豈逆キエテニ皇命ミコトニ耶ヤ」(寛文九一六六九)刊『日本書紀』二二・推古天皇二六年)。
 ●虎耳草―「石荷 今按ゆきのした虎耳草一名石荷葉」(寛文六一六六六)刊『訓蒙図彙』二〇) ●馬齒莧ばけん―「馬莧 むまびゆ俗云すべりひゆ馬齒莧ばしけん五行草並同」(『訓蒙図彙』一七) ●莊衛―「島津は、往古日向国諸県郡の地名なり、御莊は、万寿年月、近衛氏の地名なる、近衛氏此地に莊衛を置く」(天保一四一八四三)刊『三国名勝図会』五八) ●別莊／別業―「別莊シモヤキ―業」(『編』) ●精舍／香台／香刹―「仏寺テラ 精舍 精舍 香刹」異。「宝地乗峰出、香台

接漢高」(遊昌化山精舍) 盧照鄰) ●井里「和之壁、井里之厥也」(荀子) 大略) ●僻地「擬求幽僻地、安置疏慵身」(游藍田山卜居) 白居易) ●遠郡「僻郷」(編) ●雲母碓・水碓「雲母碓」は李白「送內尋廬山女道士李騰空二首」にある「水春雲母碓」。即ち雲母を春く水力の臼をいうか。「水碓」も水力を利用した臼。ミシガラウス

「水碓」(異) ●十字街「劉家在七帝坊十字街南、東入窮巷是也」(北史) 卷四三列伝三一)。「街」は「銜」の俗字(「正字通」)。「衢」^{フチ} かたぐにゆく道ある所をつちと云《略》からの書に十字街頭とあるもつじ也道の四方にわかれたるちまた十字のごとし」(元祿一二(一六九九)序「日本釈名」上 地理) ●僑居「客戸カリ僑居人」(編) ●貸房錢「賃房錢」(編) ●典舖「當舖」^{シヤウヤセ} 典舖「(編) ●典物「質物」^{シチモノ} 典」(編) ●阿堵物/孔方「錢」^{ゼニ} 阿堵物 孔方」(異) ●杖頭「常步行、以百錢掛杖頭、至酒店便独酣暢」(蒙求) 阮宣杖頭) ●路費「路費」(編) ●朱提朱提山で銀が産出されたので言う。「我有双飲盞、其銀得朱提」(寄崔二十六立之) 韓愈) ●方金「傾国より客へ進物遣す事」^{けいこく} 《略》 中間には下帯か方金にてもやるべし」(色道大鏡 寛文式下)

●碎銀「碎銀」^{キリノコダマ} (編) ●貼錢「貼錢」^{ツリゼニ} (編) ●南廷「吾妻鑑」記載の「南廷(挺)」は、本来の意味である精鍊した銀のこと。作者は明和九(一七七二)年新鑄の南鐐二朱銀を念頭に置いてるか。 ●当四錢「六道錢に新鑄の当四錢を入させ」(明和六(一七六九)刊「根無草後編」一) ●子錢家「子錢家」(編) ●

借約／券書＝「借約」^{シヤクシヤウ}、「要券」^{テガタ}。券書＝「編」●表證＝「左伝爾雅翼曹植カ表證スベキモノ也」(貞享元(一六八四)刊「庖厨備用倭名本草」一・葵)●息＝「受息」^{リツトル}「編」●一元／一天／一地／一方＝未詳。●會計＝「勾会」^{フウヘ}。會計＝「編」●經濟＝「釈迦も孔子も人にはおしへなから自家の經濟に心を尽して老後の用心に金をたぐわえ」(明和八(一七七二)刊「世間万病回春」五)●稍食／月俸＝「俸禄」^{フカク}稍食 月俸「異」●采地＝「食邑」^{シキイ}采地「編」●四宝＝「凡筆譜二卷硯紙墨譜各一卷」(『文房四譜』序)●管城子／毛穎＝「筆」^{フデ}毛穎 管城子「異」●寒素＝「必取寒素德行之士」(『抱朴子』外篇・崇教)●鈍物＝「才があつても学文があつても佞や鈍物やで口過にもかゝりかねる様子じや」(『胆大小心録』七〇)●驚才＝「莊宗罵曰、驚才、果誤予事」(『新五代史』五一雜篇三九)●老実＝「老実人」^{フウジジン}「南」●綽名／渾名＝「綽号」^{アダナ}「名」(『編』)。「沢菴和尚は但州の産にして《略》墓は一箇の円石のみなり其石異様にして大根の香の物に似たり故沢菴漬と香の物の渾名なり」(文化二(一八〇五)刊「橘菴漫筆二編」一)●紀律＝「百官於是乎戒懼、而不敢易紀律」(『春秋左伝』桓公二年)●遺業＝「東園松菊存遺業、晚景桑榆樂旧遊」(『題山莊』牟融)「家とく(督)」は遺産の意。●連城＝秦の昭王が趙の恵文王から伝説の名玉、和氏璧を十五の城と引き換えに入手しようとした故事から。「趙恵文王時、得楚和氏璧。秦昭王聞之、使人遺趙王書、願以十五城請易璧」(『史記』廉頗藺相如列伝)●上直＝「上直」^{バンアガル}(『編』)

●下直＝「下直」^{バンサガリ}(『編』)●心胸磊落＝「折しも初茄子を売者あり。衲の貴きをいはず需て。生漬といふものにして喰ひ。彼灯台に火をともし。天下第一の歡樂なりといへり。其磊落豪放およそ此たぐひとぞ」(寛政一〇(一七九八)刊「続近世畸人伝」五・英一蝶)●意氣慷慨＝意氣盛んなさまの意。「齊武王續字伯升、光武之長兄也。性剛毅、慷慨有大節」(『後漢書』宗室四王三侯列伝)●意氣揚々＝得意げなさま。「飛興揚揚飄騰天外」(文化一三(一八一六)刊「先哲叢談」六)●眈眈＝「眈眈已皆虛、跋涉会不泥」(『八哀詩』贈秘書監江夏李公邕)杜甫)●睥睨＝「莫不左右睥睨而掩鼻」(『淮南子』修務訓)●顧眄＝「援據鞍顧眄、以示可用」(『蒙求』伏波標柱)●仰慕＝「昔堯殂之後、舜仰慕三年」(『後漢書』李杜列伝)●點頭＝「首肯」點頭「編」●蓬頭＝「葬畢、廬於墓側、蓬頭跣足、負土成墳、手植松柏數百株」(『太平御覽』人事部五六・孝女)●跣足＝「跣足」^{スジソツ}「唐話使用」●空心＝「暖腹茱萸酒、空心枸杞羹」(『詩三百三首』寒山)●亡命＝「亡」^{カゲチ}「命」(『編』)●躊躇＝「躊躇」^{ヂウヂウ}「纂」●佇立＝「衡門猶未掩、佇立望夫君」(『遊精思觀回王白雲在後』孟浩然)●豪具＝「至ればいはゆるふうきの家にして席上豪具をかざり水陸並至る」(天保元(一八三〇)刊「近世名家書畫談」下)●雅馴＝本来は文章が穩当で洗練されていることをいう。「学者多称五帝、尚矣。然尚書独載堯以來、而百家言黃帝、其文不雅馴、薦紳先生難言之」(『史記』五帝本紀)●強禦＝本来は善を退ける程に強く何をもう畏れない様をいう。「学中語

曰、天下模楷李元礼、不畏強禦陳仲举、天下俊秀王叔茂」(『後漢書』党錡列伝) ●解褐ホウコウニデルは粗末な衣服。それを官服に着替へること。仕官。「筮仕。解褐」(『編』) ●叔世ホウコウニデル本来は末世の意。「周有乱政而作九刑、三辟之興、皆叔世也」(『春秋左伝』昭公六年) ●胡祝ホシ未詳。 ●賽ホシ神へのお礼。「賽、報也」(『説文解字』) ●鹵簿ハシキ「車駕次第謂之鹵簿」(『蔡中郎集』外集四・独断) ●書淫ハシキ「書癖。一書淫」(『編』) ●目睫ハシキ普通「目睫」は目とまつ毛、または転じて眼前のことを言う。「此売色大かた仏店より軒を並て四五十軒はかり有つらんはおのれが目睫をいふ」(弘化三(一八四六)成 国会本『蜘蛛の糸巻』かくし売女) ●循覧ハシキ未詳。 ●胡做了ハシキ「一向不合道理、胡做了」(『朱子語類』論語一九・子罕篇下・可与共学) ●襷袢ハシキ「雨衣。染絹襷袢」(『編』) ●月羅畢ハシキ「月離于畢、俾滂沱矣」(『詩経』都人士之什・漸漸之石) による。 ●畢ハシキ(宿)は二十八宿の一。「畢」(『編』) ●南箕崇ハシキ「箕(宿)は二十八宿の一。「哆兮侈兮、成是南箕」(『詩経』小雅・小旻之什・巷伯) ●房星ハシキ「房(宿)は二十八宿の一。「天駟(天上の馬・車駕)」を司る。「漢中四星、曰天駟。旁一星、曰王良。王良策馬、車騎滿野」(『史記』書・天官書) ●河魚腹疾ハシキ晋と楚が戦った郊の戦いで、河魚が内臓から傷むことを譬えとして、国は自ずから負けるという会話が行われたことから。「河魚腹疾奈何」(『春秋左伝』宣公十二年) ●疥癬患ハシキ齊は呉にとって深刻な脅威ではないことを比喩的に言った故事から。「夫齊之於呉也、疥癬之病也、不苦

其已也、且其無傷也」(『呂氏春秋』貴直論・知化) ●腹心疾ハシキ越が本當の脅威であることを疾病に譬えて言ったことから。「今呉之有越、猶人之有腹心疾也」(『史記』伍子胥列伝) ●疾在膏肓ハシキ「膏肓」は心臓と隔膜との間。そこに病が入ると治せないと言われていた。「医至、曰、疾不可為也、在膏之上、膏之下、攻之不可」(『春秋左伝』成公十年) ●錐脫囊ハシキ「囊中の錐(毛遂自薦)」の故事から。「臣乃今日請処囊中耳。使遂蚤得処囊中、乃穎脫而出、非特其末見而已」(『史記』平原君虞卿列伝) ●褥食ハシキ「爰ニ自ラ知ル有コトヲ凶賊」。則命ハシキ徒衆ニ。褥食ハシキ而渡ハシキ(天保一〇(一八三九)刊『常陸風土記』一・行方郡) ●蘭閣ハシキ「因過胡人前彈指云、蘭閣、蘭閣、群胡同笑、四坐並懼」(『世説新語』政事) ●喝采ハシキ「虎仆レ竜跳テ喝采収ル」(『大阪繁昌詩』中) ●敬服ハシキ「人品ヨロシク。学業モ老テマス」勤ハシキメ。勿論其父ノ功業ヲ潤色シテ。自己ノ異論ヲ立テ、人ヲ驚カスコトヲナサズ。自然二人敬服シテ。誉望日ニ盛ニナル」(『孔雀樓筆記』中) ●包袱ハシキ「ふろしき 俗に包袱の類をいふは浴後に敷て坐とする物の名より転ぜるなるべし」(『和訓栞』中・二二) ●完璧ハシキ「王必無人、臣願奉璧往使。城入趙而璧留秦、城不入、臣請完璧歸趙」(『史記』廉頗藺相如列伝) ●珠履ハシキ「春申君客三千余人、其上客皆躡珠履以見趙使」(『史記』春申君列伝) ●木屐ハシキ「木屐」(『編』) ●行厨ハシキ「食具。行厨」(『編』) ●行李ハシキ「行李」(『編』) ●結草ハシキ魏顆が娘の命を救ってくれたので、その父の亡霊が、恩返しに草を結んで強敵の杜回を躓かせて生け捕りにさ

せてくれたという故事から。「類見老人結草以充杜回、回踵而顛、故獲之。夜夢之」(「蒙求」魏類結草) ● 嘲環 〓 『続齊諧記』にある、弱った黄雀の命を救ってあげた少年が、後日に四つの宝環を返報として受け取った話から。前項と合わせて報恩を意味する「結草啣(銜)環」と、四字熟語にも。 ● 紵服 〓 「鳴鞭過酒肆、紵服遊倡門」(「長安道」 儲光義) を下敷きにした謂。 ● 怪哉 〓 未詳。「快哉」か。 ● 欠債 〓 「欠債^{ケツサイ}シヤクセ」(「纂」) ● 討債 〓 「討債^{ケツサイ}シヤクセ」(「纂」) ● 算環 〓 未詳。 ● 窮鬼 〓 「窮鬼^{ギョウキ}マツシキモノ」(「纂」) ● 旧債 〓 「旧債^{キウサイ}フルシヤ」(「纂」) ● 当東西 〓 「当東西^{タトシスエ}物ヲシチ」(「纂」) ● 没当頭 〓 「没当頭^{モクタンデウ}ガナヒ」(「纂」) ● 現金子 〓 「現金子^{ゲンキンズ}ケンキン」(「纂」) ● 価貴 〓 「価^{キヤ}銭^{ツヅ}貴^{ネカ}カ^ヒ」(「纂」) ● 価賤 〓 「価^{キヤ}銭^{ツヅ}賤^{ネカ}ヤ^スヒ」(「纂」) ● 討価 〓 「有討価^{ユウタクキヤ}カケネガアル」(「纂」) ● 貴恙 〓 「貴恙^{キイサン}御^ミビヤウキ」(「纂」) ● 賤恙 〓 「賤恙^{ツツヤン}ビヤウキ」(「纂」) ● 貴庚 〓 「貴庚^{キイケン}御^ミトシ」(「纂」) ● 貴庚多 〓 「貴庚^{キイケン}トシヤウ^{オトシ}ハイクツ」(「南」) ● 賤庚 〓 「賤庚^{ツツケン}トシ」(「纂」) ● 不肯除 〓 「不肯除^{フケンシュ}カケニハセヌ」(「纂」) ● 三十六計走為上計 〓 「檀公三十六策、走上上計。汝父子唯應急走耳」(「南齊書」第二六列伝第七王敬則 陳顯達) から「三十六計、走為上計」(「儒林外史」王秀才議立偏房 嚴監生疾終正寢) へと變化した。『唐話纂要』三「常言」に同文がある。その訳文は「逃タガヨヒ計ト云コト」 ● 花無百日紅人無千日好 〓 前項同様「常言」に同文がある。訳文は「花ハ日久シク紅ナルハナシ。人ハ日久シク中ヨキコトハナシ」。『古今譚槩』(二一九)が遡れる典拠か。 ● 画虎

画皮難画骨知人知面難知心 〓 前項同様。「常言」の訳文は「虎ヲ画クニハ。皮は画ケトモ。骨を画キカダシ。人ヲ知ルニハ。面ヲ知レトモ心ヲ知ラス」 ● 大丈夫一言駟馬難追 〓 前項同様。「常言」の訳文は「大丈夫ノ一言ハ。少シモチカヒナシト云コト」 ● 種瓜得瓜種豆得豆 〓 前項同様。「常言」の訳文は「善事ヲスレハ。善事ガアリ。惡事ヲスレハ。惡事ガアルト云コト」

《翻刻》

さて時令佳節の事を少し申さん

○ 端月 正月 履端 元日 椒觴 元日は元日柏の酒をす、むに人日七種の日を勝花とは此日つくり花 花月 二月 春社 春の社日也日本ではむかしからあまりは立春の後五度目 新火 清明の節 改火 同 桐月 三月 修禊 禊はけからはしきこと戌の日でござる 寒食 寒食は日百五日め也 梅月 四月 蒲月 五月 午日 端午 浴蘭 端午は蘭湯を以 蒲酒 蒲酒を以 暑月 六月 河朔 飲なり、み瓜 月 七月 乞巧 七夕は七人の星をそなへて願ことをこふこと也此夜針に 穿針 針 同 蘭燈 燈籠 日本にては七月これをとほす 火樹 同 走馬燈 燈籠 中元 正月十五日を上元といひ七月を 桂月 八月 觀濤 牧棹十五夜に広陵といふ十五日夜月 此夜は青樓へのぼるがよふござる 興亮 南樓へのぼる 揚月 十月 揺落 木の葉の 登高 此日高い所 囊裏 寒食を臂にして山にのぼる 陽月 十月 揺落 木の葉の 十一月 至日 冬至 亜歲 同 添線 冬至の 餽歲 餽 音物也 臘月 十二月 歲杪 歲暮 別歲 年わすれ 餽歲 餽 音物也 とあらましかたれどことおほく下手の長はし長ばなしさすがの此蔵げんなりしぼく

く眠ればさし出す枕ちんくなるは鶏鳴枕いやもう斜陽西に春く
まづ今日はこれぎりの義理できかずにこのみなら近日（三十七
才）後編御目にかけまじやう（三十七ウ）

《語釈》

●端月〓「正月為端月」（『月令広義』五）●履端〓「履端元日、正
始之初」（『月令広義』五）●椒觴〓長命を祈つて飲んだ。「觴」は
盃。「俗以歳首用椒酒、椒性芬香、人中為藥、咒而飲之」（『太平御
覽』時序部一四・元日）●人日〓「正月七日為人日」（『略』）以七種菜
為羹」（『太平御覽』時序部一五・人日）●勝花〓「唐ノ朝廷ノ制ニ
立春ノ日侍臣ヲ望春官ニ召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝花トテ作りハナ
ヲ賜フ由文昌雜錄ニ見ヘタリ」（文化元（一八〇四）刊『博』）●花
月〓未詳。●春社〓春の社日。「立春後五戌為春社」（『月令広義』
二）●新火／改火〓古代中国で寒食の日（後出）に榆、柳でつけた
火を臣下に配つてこれを民に伝えたことから。「榆柳火 唐土ノ
政 年中ノ火榆柳ノ火ヲ用ユ春ハ木夏ハ火ニ属スル故木生火ノ義
ヲ以テ今日改ルナリ」（『博』）。「清明」は二十四節季の五番目。●
桐月〓未詳。●修禊〓上巳（三月三日）に水辺で行われた禊。「王
羲之蘭亭修禊事、此春禊也」（『略』）三月上巳、張樂於流水」（『正字
通』禊の項）●寒食〓後引により、火を使わない食事を行った。
「春秋ノ時晋ノ文公ニ仕ヘシ介子推トイフ賢人ノ焼失シ日ナレバト
テ三日ガ間火ヲタツナリ」（『博』）●梅月〓「四月 梅月 八こと
月」

（安永九（一七八〇）刊『俳諧四季部類』）●蒲月〓「五月之部 異
名 蒲月」（『博』）●午日〓「猶五月五日午日也」（正保三
（一六四六）刊『塩囊鈔』二）●浴蘭〓「沐芳莫彈冠、浴蘭莫振衣」
（『沐浴子』李白）●蒲酒〓「蒲酒」（『編』）。「端午日 蒲酒」（承応
三（一六五四）刊『尺牘双魚』八）●暑月〓「親王及三位以上暑月
薨者 謂六月 七月」（『令義解』慶安三（一六五〇）年版本）●河朔飲〓劉
松らが三伏の暑いころに河朔（河北）の地で飲酒した故事から転じ
て避暑の為の飲酒をいう。「光祿劉松北鎮、而袁紹夜酣酒、以盛夏
三伏之際、昼夜与松飲酒、至於無知、云以避一時之暑、故河北避暑
飲」（『芸文類聚』五）●瓜月〓未詳。●乞巧／穿針〓「乞巧」は
「乞巧奠」の略。七夕祭の原型。「七月七日《略》是夕。人家婦女結
綵縷。穿七孔針。《略》陳凡筵酒脯瓜果於庭中。以乞巧」（『荆楚歲
時記』）「穿針 七夕ノカゲニテハリヲトラスコト」（『博』）●蘭燈／火樹〓
「堂宇留光、蘭燈有時不照」（『南齊書』卷三十六列伝第十七 謝超
宗 劉祥）。「華燈若乎火樹、熾百枝之煌煌」（『南齊書』礼志上）●
走馬燈〓「走馬燈 走馬燈 走馬燈 走馬燈」（『南』）●桂月〓「八月 桂月」
（『異』）●觀濤〓「漢枚乘七發 將以八月之望、往觀濤乎広陵之曲
江」（『芸文類聚』五七）●十五夜月〓「亮在武昌、諸佐吏殷浩之
徒、乘秋夜往共登南樓、俄而不覺亮至、諸人將起避之。亮徐曰、諸
君少住、老子於此処興復不淺」（『晋書』七三列伝四三）「青樓」は
妓樓。品川は江戸から南方にある岡場所。●菊月〓「九月之部 異
名 菊月」（『博』）●重九〓「重陽節△重九」（『博』）●登高〓

「重九」○登高日「博」●囊萸「汝南桓景、随費長房遊學累年。長房謂之曰、九月九日、汝家当有災厄、急宜去、令家人各作絳囊、盛茱萸以繫臂、登高飲菊酒、此禍可消」(『芸文類聚』四)●陽月「十月異名○陽月」(『博』)●搖落「悲哉秋之為氣也。蕭瑟兮草木搖落而變衰」(『楚辭』九弁)●葭月「未詳。●至日／重歲」(『編』)●添線「魏のころ、冬至を越えると宮中で機織りに一線ずつ加えたことから転じて、冬至後の日々をいう。『魏開寓中以紅線量日影冬至後日添長一線』(『歲時広記』)●臈月「臈月正月早驚春」(『芸文類聚』八六・果部上)●歲杪「年末の意。『杪』は梢、終わりの意。『中台一襟涙、歲杪別良朋』(『歲暮自広江至新興往復中題峽山寺』李洞)●別歲「別歲」(『編』)●餽歲「蜀之風俗、晚歲相与饋問、謂之饋歲」(『風土記』晋 周処)。「餽」は「饋」と同字(『広韻』)。「音物」は贈り物。「簪の方より舅への音物に臘燭を箱入にしてやりけるが」(寛延四(一七五二)刊『輕口浮瓢單』四・臘燭喰)●鷄鳴枕「本来「鷄鳴」は鷄が鳴くこと。また、夜明け。『夜半至函谷関。秦昭王後悔出孟嘗君、求之已去、即使人馳伝逐之。孟嘗君至関、関法鷄鳴而出客、孟嘗君恐迫至、客之居下坐者有能為鷄鳴、而鷄齊鳴、遂発伝出』(『史記』孟嘗君列伝)。「鷄鳴」(『編』)●春く「日が傾く。『至於淵虞、時謂高春、至於連石、是謂下春』(『淮南子』天文訓)」

《翻刻》

朱楽館江一卷の書を著し堀の圮橋の上にして奴の此藏に授く豈啻奴の闕文を補ふのみならんや上は大通本だのはけ先キ下はへんてこ浅黄のうらまで此一巻を懐にせば渡りに猪牙を得たるが如く寒きに河豚を啜るが如し惜哉奴が藩を出る時に寢席と、もに巻おさめて夜発の關中にある事久し今幸に一本を得て当四銭にも易じとすこれをよむものこの語を事と(三十八才)し世上の自慢の鼻梁をグハンといふほど見しらせ給へ

前棒組大酒兼東海道五十三次野原宿福雲輔跋

今様

古法帖書 (三十八ウ)

牛込御細工町

駿河屋藤助藏版

彫工

浜村錦治(後見返し)

《語釈》

●圮橋「圮橋」(『編』)●大通本だのはけ先キ「当時通人に流行の本多鬻。●へんてこ」不粋なこと。「此卦の客はあれ共へんてこにてはかをぐいやりにして大ニなんぎすることあり」(明和八(一七七二)刊カ『擲錢青楼占』)●浅黄のうら「浅黄裏。田舎侍の蔑称。粗野、無知なので遊郭で嫌われた。●渡りに猪牙」慣用句

「渡りに船」に吉原通いの猪牙舟をかけた。●寒きに河豚を啜る
「河豚の絵も添て雪見の誘ひ状」(『俳諧鱗』五) ●藩^{やしき}藩邸をいう
か。「藩邸^{ちうけん}の健児は女太夫に門のしまりをわすれ」(安永三
二七七四) 刊『風流碎談議』五)。●寝席^{ネゴザ}「臥席。睡」(『編』
「寝席」は寢床。「病者寝席、医之用針石」(『淮南子』説山訓) ●夜
発の關中^{やたか}夜鷹は低級な街娼。「夜発といふもの至て下賤^{げせん}の遊び^{あそ}
して」(宝曆六(一七五六)三刊)。遊興に関する佚書が壁から出て
くるのは寛延二(一七四九)刊『跣婦伝』以降、再三使用される趣
向。●野原宿禰雲輔^{きのとんまる}狂歌師。「野原雲輔」は紀定丸の前号。大田
南畝の甥。

了。